

長瀬と森越 ルーツを探る旅

1. 「長瀬」の地名の由来

長瀬という地名がどうしてできたのか、はつきりとはわかつていません。

一説には、大昔の矢作川は北野より下流に広がって幾筋にも分かれ、洪水の度ごとに流れが変わり、長い瀬のように流れていきました。その様子から「長瀬」と呼ばれるようになったと伝えられています。

右の絵図は松応寺蔵古絵図で、左上部に北野廃寺、中央に矢作川が描かれており、矢作川の左側に幾筋もの長い瀬が流れていることが描かれています。



2. 「長瀬」の地名はいつ頃誕生したのか

『新編岡崎市史 中世 2』の88頁に「承久の乱後は碧海荘に足利義氏が新補地頭として入部する。前司が京方武士であったとすれば、その名を長瀬次郎といったかもしれない。というのは、建暦二年（1212年）に尾張国の近衛家領長岡荘の地頭に補任された人物が「参川国住人字長瀬次郎」であり」と記載されており、歴史上初めて「長瀬」の名が登場します。

足利義氏が新補地頭としてこの地に入部し、長瀬次郎と名乗ったのであれば、地名の「長瀬」はそれ以前から存在していた訳で、これがいつかは読者の考察といたします。

また、『滝山寺縁起』（滝山寺文書7）に「佐馬四郎源ノ義繼、長瀬四郎と号す」とあり、足利義氏の子義繼が長瀬四郎を名乗ったことが記載されています。

さらに前掲の『新編岡崎市史 中世 2』の90頁 碧海荘の郷の項では、[鎌倉時代後



期の碧海荘の様子を多少と伝え 新編岡崎市史 中世 2 ている史料に、「紀伊続風土記」

附録所載の永仁三年（1295年）八月の熊野山日供米碧海荘配分状があります。

この文章は熊野山日供米碧海荘配分事とあるもので、年貢＝熊野山日供米を碧海荘内の郷々へ配分（賦課）し、それぞれの郷がこの年に負担すべき額を定めたものである。]とあります。

この配分表の郷名の中に「長瀬郷」の記載があります。

これが「長瀬」の書面としての初出となっています。

表1-1 永仁3年8月熊野山日供米碧海荘内郷々配分表		
郷名	配分高	備考
占部郷	114	定国村、正名村、国正村、中村
中村	42.8	中之郷村
高郷	29.87	村高村（現安城市）
下青野郷	35.3	下青野村
宇祢部郷	24.73	中島村、中切村、宗定村、川端村、国江村、阿弥陀堂村（現豊田市）
薬師寺郷	4.47	？（上渡村に薬師畔の小字あり）
橋良郷	8.65	柱村（ただし額田郡）
津々針郷	2.47	筒針村
下渡郷	11	下渡村
長瀬郷	70.5	森越村、北野村、袖越村、橋目村など
宿石郷	1.4	？（宿とあるので矢作西宿か）
小針郷半分	5	小針村「尾藤兵衛六部分」
博戸郷	4.2	暮戸村
南小崎三分一	4.2	尾崎村（現安城市）
同郷三分一	1.1	”
牧内郷	1.1	東牧内村、西牧内村
上戸郷	38.89	？（ウヘト→ウト→ウトウと転化し、宇頭村か）
大友郷	10.54	東大友村、西大友村
計	(410.22) 409.5	・郷名の記載順は史料のまま ・備考欄には近世の村名をあげた ・出典：『鎌倉遺文』25-18898

3. 「長瀬山」と「森越山」

豊田市桝塚東町から岡崎市北野町にかけて、起伏のゆるい松林と荒地からなる、長瀬山と呼ばれた一帯がありました。



おおよそ白円の内側が長瀬山と呼ばれたところ
おおよそ黄円の内側が森越山と呼ばれたところ

ありました。

この地は、江戸時代には下草や雑木を取るための入会権が設けられた山野でもありました。

農山村に生活する者にとって、山野は欠くことのできない、家の作材・薪炭材、下草・落葉など、地力維持のための肥料や牛馬の飼料の供給地がありました。

江戸時代徳川家綱の治世 [[慶安四年 (1651年) から延宝八年 (1680年)]] では、全国津々浦々に開拓・開墾が奨励され、いたるところで開発が行われました。

松林と荒地であった長瀬山でも、一部の人たちにより開墾され、耕作が行われるようになりました。

この時期、森越は石高が倍増 (表 1) しており、北野町の長瀬山を開拓していた事がうかがえます。

そこは、森越山あるいは森越村と呼ばれていて、現在でも、森越町の旧家の多くが土地を所有しており、「山畠」と呼んでいます。

岡崎領のうち森越の石高とその変遷

表 1

年代	寛永十二年	寛文四年	寛政元年	天保五年	明治元年
西暦	1635年	1664年	1789年	1834年	1868年
石高	単位一石	同左	同左	同左	同左
森越	114,735	223,714	234,840	311,335	246,165

4. 長瀬郷で規模は最も小さいが文化・学問と行政の発祥地 森越

1. 長瀬郷で規模の最も小さい森越

表2は『新編岡崎市史 近世7』の1037頁 町村行政沿革・領主支配・石高変遷一覧です。

町村名	年代 石高-領主	明治・大正・昭和				明治元年 石高	領主
		町村沿革					
横目村	M11 横目村					682,427	岡崎藩
西野新田						3,300	○白山市領
森越村	M22 長瀬村	M39 大伴町	S30 岡崎市			53,614	岡崎藩
上野手水頭分区域						246,165	岡崎藩
柚越村						61,879	○長寿寺領
北野村						3,300	○長寿寺領
久後村	M11 久後崎村	M22 天白村	M39 三島村	T5 岡崎町		651,633	岡崎藩
福島新田						6,000	○願照寺領
赤波村						505,554	岡崎藩
牧御堂村	M22 横海村					175,132	岡崎藩
法性寺村						144,407	岡崎藩
中之郷村						431,255	岡崎藩

表 2



新編岡崎市史 近世 7

下の表3は、表2の石高変遷一覧から岡崎領のうち長瀬村各大字の石高とその変遷をまとめたものです。時代が進むにつれて新田開発などが行われ、石高が増えていることが分かります。

一方、村内に道路、堤防、池などの土木工事が行われることにより、田畠がつぶれ石高が減少している村もあります。

森越は、寛永十二年から寛政元年までの29年間で石高は倍増していますが、長瀬村の中では最下位の石高で、寛政元年から明治元年までに79年間は、最下位を免れているものの、西大友との差はわずかです。

岡崎領のうち長瀬村各大字の石高とその変遷

表 3

年代	寛永十二年	寛文四年	寛政元年	天保五年	明治元年
大字\石高	単位一石	同左	同左	同左	同左
森越	114, 735	223, 714	234, 840	311, 335	246, 165
舳越	388, 300	638, 304	651, 633	657, 633	651, 633
中園	199, 571	366, 163	371, 545	371, 545	371, 545
橋目	389, 430	613, 784	671, 588	682, 427	682, 427
東大友	大友村	539, 982	543, 728	543, 728	543, 728
西大友		444, 330	240, 311	240, 969	240, 969

右の表4は『舳越町史』71頁に記載された昭和八年の長瀬地区における村別養蚕飼育の割合を表にしたもので

表4で注目していただきたいのは、各村の全戸数の覧です。

昭和八年の森越の戸数は30戸で、32戸の西大友と拮抗していますが、最も少ない戸数となっています。

表 4

春蚕飼育調 (昭和八年) 矢作国民学校 (現矢作中) 生徒調

村別	全戸数	飼育戸数	桑畠反別（畝）	掃立数（g）	一戸平均（g）
森越	30	24	835	1,670	68
舳越	47	39	1,543	3,042	78
中園	40	21	450	940	45
橋目	133	80	2,456	4,190	49
東大友	50	22	739	1,410	62
西大友	32	20	464	980	49
北野	86	56	1,627	2,436	52
小針	63	36	1,495	1,885	62

表5

(15) 矢作町 1938(昭13)年											
字名	人口	戸数	字名	人口	戸数	字名	人口	戸数	字名	人口	戸数
矢作一区	420	84	橋目丙	206	32	東本郷	301	61	東島	201	29
矢作二区	441	93	東大友	267	50	北本郷	154	30	西島	166	28
矢作三区	1,250	250	西大友	142	31	筒針	241	49	小望	203	41
矢作四区	805	159	小針	316	63	渡上	219	55	池端	73	15
中園	231	42	柿崎	236	49	渡下	336	60	西牧内	183	39
舳越	254	45	宇頭茶屋	288	72	東牧内	161	31	桑子	150	35
森越	176	32	尾崎	389	69	上佐々木	164	31	富永	172	35
北野	430	85	宇頭	356	89	下佐々木	245	49	新堀	202	44
橋目甲	227	44	暮戸	149	35	河野	261	43			
橋目乙	307	55	西本郷	429	67	坂戸	110	22			

(備考) 矢作町『矢作町勢要覧』1938年

とは人口及び戸数に大きく差があります。

左の表5は、『新編岡崎市史 近代 上9』53頁の「矢作町勢要覧」に記載されている昭和十三年（1938年）の矢作町字名別の人口と戸数の表です。

昭和十三年の森越の人口は176人32戸で、142人31戸の西大友とはわずかの差で勝っていますが、拮抗している状態です。

また、他の長瀬地区



新編岡崎市史 近代 上9

右の表6は、『新編岡崎市史 現代 11』14頁の面積・人口の表で、昭和四十年から昭和五十五年までの5年ごとの人口の移り変わりと、昭和五十五年の世帯数が記載されています。

表6を見て分かるように、森越町の人口は昭和五十年までは西大友町より若干多いですが、昭和五十五年には西大友町に大きく差を付けられ逆転されました。

ただ世帯数は303世帯で、西大友町と同数となっています。

表6

町名	面積・人口				世帯数
	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	
暮戸町	248	253	218	211	54
小針町	470	763	843	1,664	610
島坂町		568	662	682	158
下佐々木町	258	294	315	287	69
昭和町		550	531	630	246
大和町		798	1,495	2,619	682
筒針町	959	1,127	1,385	1,237	338
富永町	208	241	259	256	65
中園町	432	654	916	1,174	342
新堀町	252	236	340	374	83
西大友町	225	324	529	1,124	303
西本郷町	890	1,183	1,384	1,478	386
橋目町	911	1,195	1,659	2,387	751
東大友町	360	513	912	1,510	444
東本郷町	387	445	475	479	115
東牧内町	209	319	563	585	144
舳越町	432	887	1,223	1,285	344
森越町	267	378	673	955	303
矢渡町	9,118	8,652	8,118	7,470	2,150
	1,151	1,410	1,704	1,734	494

ここまで寛永十二年（1635年）から、昭和五十五年（1980年）までの345年間の長瀬地区の人口及び世帯数を、主に新編岡崎市史に掲載されている記録で比べてきました。

いずれの記録も森越町は、長瀬地区の中では最小の規模又は、最小の規模は免れているものの、その差は僅差になっています。

本年令和七年（2025年）の森越町の規模は、持家世帯が530世帯を超え、アパートの世帯を加えると1200世帯ほどになり、この45年間に303世帯から1200世帯へと急速に規模が拡大しました。

2. 長瀬地区の現代にも続く文化・学問と行政の発祥地 森越

1) 現代にも続く文化の発祥地 森越

(1) 郷社長瀬八幡宮

旧地区の名称「長瀬」を冠する神社であり長瀬地区唯一の郷社で、毎月第3日曜日に月次祭が執り行われています。中でも10月の第3日曜日は例大祭が執り行われています。

また新嘗祭・源太夫祭なども執り行われています。

令和7年の現在でも格式・規模とも長瀬地区随一の神社です。



2) 現代にも続く学問の発祥地 森越

(1) 長瀬地区の学校の始まり 寺子屋

表7

表7は『碧海郡誌』に掲載されている、幕末時代より廃藩置県のころに存在した寺子屋の13箇所を列挙したものです。

表7の左端に寺小屋の所在地が森越と記載されており長瀬地区で最も早く開業した寺子屋は森越町の長壽寺で開かれた寺子屋になることを表しています。

当時の生徒数は40名、教師は僧侶の上原信壽氏であることはわかっていますが、寺子屋の開業期と廃業期は共に不詳となっています。

尚、『新編 岡崎市史4』には開業1852年頃（嘉永末）、廃業1873年（明治六年）と記載されており、おおむねこのころ開・廃業したものと考えられます。



森越町 長壽寺

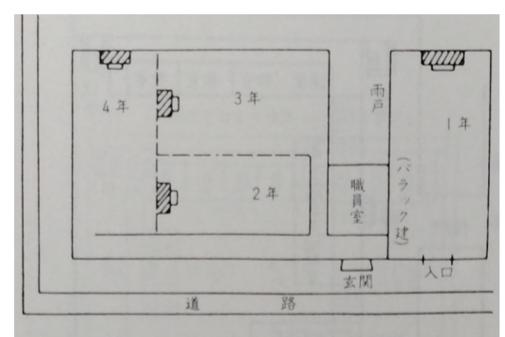
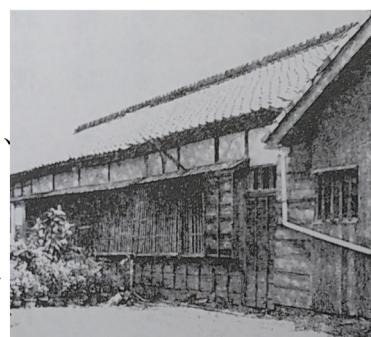
ば左の十三を算する事が出来る。

第五編 教育及宗教

一一四

森		暮		簡		小		渡		渡		下		佐		上		佐		東		東		矢		矢		所	
越	戸	針	望					天	天	天	天	佐	々	木	木	佐	々	木	本	本	郷	郷	作	作	在	地			
不	安	慶	不	天	天	渡	渡	安	天	天	天	上	上	佐	佐	東	東	矢	矢	所	在	地	地	地	地	地	地	地	
詳	政	應	不	保	保	渡	渡	政	保	保	保	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
不	慶	明	明	明	明	渡	渡	慶	慶	慶	慶	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
詳	應	應	應	治	治	渡	渡	應	應	應	應	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
四〇	七〇	六七	不	明	明	渡	渡	五	五	五	五	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
僧	農	僧	僧	僧	僧	渡	渡	醫	醫	醫	醫	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
上	中	筒	平	大	久	下	石	山	山	山	山	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
原	根	井	岩	河	松	松	川	田	岡	岡	岡	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
信	治	英	義	内	岩	岩	岩	寶	海	海	海	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	
壽	郎	秀	圓	秀	道	道	道	心	道	道	道	佐	佐	々	々	本	本	作	作	在	在	在	在	在	在	在	在	在	

移転新設された碧海郡立長瀬学校



この寺子屋は明治六年（1873年）七月四日、村の有力者たちがお金を出し合い、長壽寺に森越義校を立て、森越村・北野村・橋目村の子供たちが通う事になり、翌年の明治七年には長壽寺から長瀬八幡宮の東隣に移転新築されました。

(2) 森越義校そして矢作北小学校へ

明治 6 年 (1873 年)	7 月 4 日	森越義校開校 のち第 2 大学第 7 中学区第 18 番小学森越学校に改称
同年	8 月 1 日	舳越義校開校 のち第 2 大学第 7 中学区第 30 番小学舳越学校に改称
明治 9 年 (1876 年)	8 月	碧海郡立長瀬学校に改称 (旧森越学校)
明治 13 年 (1880 年)	3 月 31 日	舳越学校を長瀬学校に合併 就学年限 3 年となる
明治 15 年 (1882 年)	1 月 11 日	第 19 小学区第 18 番小学長瀬学校となる 修身科目が重要視
明治 25 年 (1892 年)	7 月	碧海郡長瀬村立長瀬尋常小学校に名称変更 森越・舳越・橋目・北野・中園・東大友・西大友が合併長瀬村となる
明治 35 年 (1902 年)		碧海郡長瀬村立長瀬尋常小学校が橋目に移転新設される
明治 39 年 (1906 年)	5 月 1 日	矢作第二尋常小学校に名称変更 修業年限 4 年から 6 年になる 行政区変更で、長瀬村は他の村と合併し矢作町となる

昭和 9 年時の
矢北第二尋常小学校
東方より望む



昭和 16 年 (1941 年)	3 月	碧海郡矢作北国民学校に名称変更 戦争勝利のための国民教育をするため国民学校令布告される
昭和 22 年 (1947 年)	4 月 1 日	碧海郡矢作町立矢作北小学校に名称変更 6・3 制が導入される
昭和 30 年 (1955 年)	4 月 1 日	岡崎市立矢作北小学に名称変更 矢作町が岡崎市と合併する

昭和 32 年の
矢作北小学校



昭和 60 年 (1985 年)		岡崎市立北野小学校新設 矢作北小学校は昭和 59 年には 41 学級・生徒数 1761 人となり 北野町・橋目中町・小針町が北野小学校へ移る
------------------	--	--

新設された
北野小学校



3) 現代にも続く行政の発祥地 森越

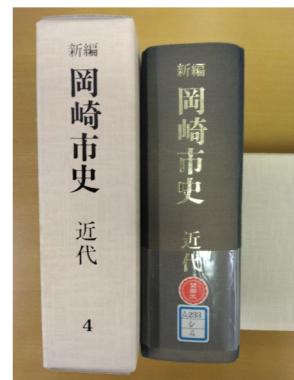
(1) 長瀬村役場

『新編岡崎市史 近代 4』の169頁に町村制下の町と村、「1889年の町村合併による新町村」と題した表の中に、新町村名と役場位置旧町村名が記載されています。

新町村名覧の上から八つ目の長瀬村では、役場の位置として森越と記載されており、旧町村名として中園村・舳越村・森越村・北野村・橋目村・東大友村・西大友村が記載されています。

すなわち1889年の町村合併により長瀬村の役場が森越村に置かれたことの記録です。

1 町村制下の町と村		表III-1 1889年の町村合併による新町村		現岡崎市域
新町村名	役場位置	旧町村名	現岡崎市域	
碧海郡				
中郷村	桑子	富永村 桑子村 新堀村 小望村 館出村 坂戸村 島村 池端村 西牧内村		
阿乎美村	下青野	高橋村 上青野村 在家村 下青野村 福桶村 合歓木村		
中島村	下中島	安藤村 高畑村 下中島村		
占部村	中	正名村 定国村 下三ツ木村 上三ツ木村 中村 国正村 坂左右村 下和田村 野畑村		
糟海村	井内	井内村 宮地村 上和田村 法性寺村 牧御堂村 土井村 中ノ郷村 赤波村		
本郷村	北本郷	渡リ村 筒針村 東本郷村 西本郷村 幕戸村 北本郷村		
矢作村		矢作村		
長瀬村	森越	中園村 舳越村 森越村 北野村 橋目村 東大友村 西大友村		
志貴村	宇頭	小針村 柿崎村 宇頭村 尾崎村 宇頭茶屋村		
額田郡				
岡崎町	康生	岡崎康生町 同連尺町 同籠田町 同横町 同祐金町 同十王町 同島町 同唐沢町 同六地蔵町 同伝馬町 同両町 同投町 同裏町 同門前町 同久右エ門町 同上肴町 同亀井町 同能見町 同八幡町		



新編岡崎市史 近代 4

では、この役場は森越村のどこに置かれていたのでしょうか？

下の地図1は、明治二十二年（1889年）の長瀬村の地図の一部です。

この地図1に森越村に置かれた役場の位置が記載されています。

それがどこかと言いますと、長瀬八幡宮のすぐ東側に○印がある事がわかると思います。

ご存知のように地図の表示で○印は町村役場の位置を表しています。

すなわち、この○印の場所に長瀬村の村役場が置かれたと言うことです。

ちなみにこの場所は、明治七年（1874年）森越義校が移転新築された校舎がある付近です。



この地図を見て面白いのは、明治七年の時点では、森越町を東西に貫く主要道路が真直ぐではなく、縁起の良い「九まがり」になっています。

また、上部に「松鹿ヶ」と表示されたところがあります。いわゆる「鹿ヶ松」のことです。

少し見にくいけれど、矢作川の堤防上に小さな○が描かれており、この場所に「鹿ヶ松」が植えられていたことを表しています。

更に、矢作川の中に2つの中堤防が描かれています。現在は姿かたちがありませんが、土で埋められる前は、家下川と上郷幹線水路（上野川）が流れ矢作川に合流していました。

地図1

5. 森越町の旧跡

1. 森越城

森越町に「字城屋敷」と言う地名があります。

ここに森越城があったことから「字城屋敷」と地名が名付けられたと考えられ、地元でもお城があつたと言い伝えられていました。

しかし、そのお城はいつ築かれ、どのような大きさだったのか、具体的な内容は伝えられていませんでした。

そこで、森越城はいつどこにどのような姿で築かれたのか、まずは公文書館の資料を調査しました。すると図2の資料が見つかりました。

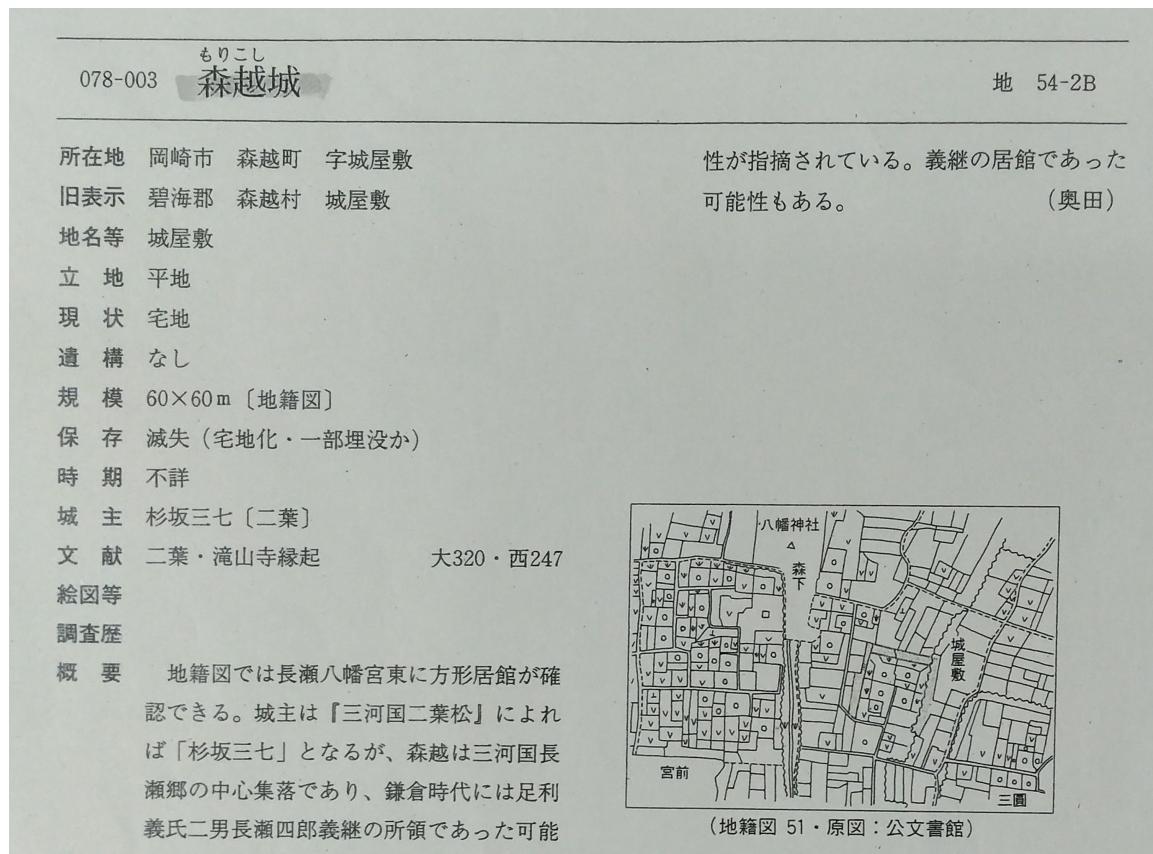


図2

公文書館の資料では、立地は平地で、規模は60×60m（詳細絵図掲示）、築城時期は不詳、城主は杉坂三七と記載されています。

次に調査した「新編 岡崎市史 総集編」には、森越村古城と題し、[岡崎市森越町字城屋敷にあつた中世の居館。

矢作川右岸の自然堤防上に立地。

大門の対岸で矢作川渡河点のひとつ「上の渡」に近い位置。

「二葉松」には「(森越村 杉坂三七)」とある。森越には長瀬八幡宮があり中世の長瀬郷の中心であった。

長瀬郷は中世のはじめから開発されており、三河守護足利義氏の子義継は「長瀬四郎殿」と呼ばれていたので、長瀬に居館を構えていた可能性もある。

現在城跡は宅地化して遺構は全くみられない。

かつて東西70メートル弱、南北75メートルで、空堀と土塁で囲まれた方形単郭の居館址があつた（「矢作町誌」）。土地宝典（昭和10年）には字城屋敷に推定60メートル四方の居館の跡が、わずかに認められる。]と記載されています。



また「新編 岡崎市史 中世2」には、「長瀬八幡宮は足利義継ないしその一族によって勧請されたと考えれば、それらの氏神などは館の北方に建てられることが多いから、森越町の城屋敷のあたりに義継の館があったかもしれない。現在長瀬八幡宮の東に長さ30m幅3mほどの空堀と崩れはあるが土塁が認められる。」とある。

さらに「矢作町誌 石川松衛編」には、森越村城址と題し、「杉坂三七の居城にして字城屋敷にある。

現状は東西北の三方に高土居が有って東西三十七間南北四十一間今宅地となっている。

出口一方にして外側凡幅三間ほどの乾濠あり土居に沿えて細き深田がある。

西方を旧字門屋という。尚其北に板倉弥十郎の屋敷跡がある。」と記載されている。



黄色の範囲が堀

この様に、資料によって遺構の残存状態が異なり、城の大きさは3600m²から5000m²程のよう、城の北にあった神官板倉弥十郎の屋敷を含めると、8000m²以上あるお城であったと考えられます。

築城時期ははつきりとはわかりませんが、「長瀬四朗」の屋敷であったとすれば、居館としては鎌倉時代の半ばには築かれたはずであり、その後用途が城に変更になったのではないでしょうか

ところで、「矢作町誌 石川松衛編」の基となる「矢作町誌 大正版」には、宅地にして杉坂四家の居住となる。とも記載されており、この杉坂四家とは杉坂治重宅、杉坂悟宅、杉坂照子宅、中村俊六宅の四家のことです。

尚、中村家には現在も高さ1mほどの塚があり、矢作町出身で著名な考古学者の石田茂作氏は、「大変貴重な塚です」と調査後話されたとのこと。

また、塚を守るように植えられている「マキ」の木は樹齢200年ほどらしく、いにしえの森越城に思いを馳せてみてはいかがですか。



中村家の庭にある塚

では森越城が築かれた目的は何だったのでしょうか

古来城は居館から砦に、そして城へと発展してきており、戦略的観点から街道の要所で天然の要害を利用したものが多いため、日本ではおのずと山城が多く、次に岡の先端に築かれている城、すなわち「守り易く攻めにくい」防御しやすい場所に築かれることがほとんどです。

ところが森越城は平地で、矢作川の自然堤防の上に築かれており、「守りにくく攻め易い」城を置くには不適当なところに築かれています。

近くには主要街道の要所に築かれ、岡崎城の支城との見方がある小針城があり、城の役割の重要性から、その規模は森越城の4倍ほどの21,000m²もある巨大なものになっています。

この様に考えると、森越城は長瀬八幡宮に近接しているため、長瀬八幡宮を守ることが主な目的であったと考えるのは考えすぎでしょうか。長瀬八幡宮の東側は現在も隣地との間に溝があり、森越城の堀の後と代々伝えられてきたことから、地図1の堀の後は内堀で、ここが外堀だったと考えると、いよいよ歴史の面白さに触れることになる事でしょう。